

ひえかわとうげ
「冷川峠」

馬場 駿

朝の八時半に、二階の物干しに日が差すのと同時に蒲団を干した。ご近所に「とうとうあの親父、寝小便か」などと思われては心外だが、パジャマがぐっしよりと濡れるほどの寝汗をかいたので干さざるをえない。敷布団の濡れている場所が真ん中付近ではないので、まさか誤解はされまいと思いつつ気になつて仕方がない。これが孫でもいれば、「お孫さん、泊まつたでしょ、きのう」などと、先様が勝手に思いをめぐらせてくれるのだが、あいにく、先立

った女房の畑に問題があつたのか、私の種が弱かつたのか、子どもはいない。だから孫もない。「じやあ誰のだ」と結局噂はそこに来そうだ。あの蒲団が自然に目に入るご近所は四軒、真後ろのしもた屋を除けば、金物屋、乾物屋、クリーニング屋、皆昔からの商いだ。しかも当代の主はガキの頃から知っている連中で、その分口が悪い。うっかりすると「悪事千里を走る」のたとえで、今日の夕飯どきには、「いでゆ蕎麦の奴、とうとうボケた」と決め付けられるに違いない。

ぐじゃぐじゃ考えながらゴローを連れて歩道を歩いていたら、「きやつ」と急に若い女の声が出て、足元のゴローが「ワン」と吠えた。一瞬何が起つたのかと立ちすくんだのだが、ズボンから下が冷たくなつてきたのと、目の前の女店員がヒシヤクを持っているので、『ああ、水を掛けられたのか』と腑に落ちた。

「ごめんなさい、すみません」
気の毒なほどにあわてて彼女は、首からタオルを

「外すと、私の足元にひざまずいてズボンを拭きだした。」

「い、いいから、そこまでしなくても」

「ゴローはと見れば、『いや許さん』とばかりに、何度目かのブルブルをして、しつこく彼女をにらんでいる。血統的にはいい秋田犬なのだがいかんせんまだチビだ、犬としての修行ができていない。」

傍から見れば、私が無理やりズボンを拭かせているように見えるはずだ。『まずいな、どこかのばあさんが二人こっちに来る』と私は困惑の度を増し、想いとはまったく逆効果になる怒鳴り方をしてしまった。

「もういいってのに！ 恥ずかしいだろうが」

拭く手を止め、顔を上げた彼女。その目にはうっすら涙があつた。

『くそ、なんて日だ』

寝汗、打ち水、女の涙。今日は水難の相がある
と、私はほうほうの体で退散した。

せかせかと店に戻ると、モツサンがバイクで出掛

けるところだった。本名は長沼次郎、最初動きがモタモタしていたので女房がこのあだ名をつけた。この男、三十五にもなるのに独り者で彼女のかの字もない。蕎麦打ちの腕はいいし、気性も穏やかで、ややニヤケてはいるがどちらかといえば男前、「商店街に見る目のある女はいないのか」と、私がときどき会合でぼやくほどのいい人間なのだが。

「あ。小説のお仲間から手紙来てました。そうそう親方、医者行ったほうがいいですよ、ゆうべの咳、下まで聞こえましたよ」

そんなことは分っている、と反発が先に立ったが、こっちの身体を心配してくれているのに怒るわけにもいかない。無視することにして、

「この先の花屋の店員なあ」

「ブチフルーの若い子、ちよつとブスちゃんの。タツパはかなりありますけどね」と言つて、不満の代わりに空ぶかしでガスを吐いた。人の話はちゃんと聞けよ、という意味らしい。

「ブスじゃないだろ、あの程度なら」

別に怒ることもないのだが、そんなに簡単にブスだと言つて一個の人格を切り捨てていいものか、と少しばかり感情的になったのだ。いや、きょうに限らず、最近、イライラが募っている。たぶん体調が悪いせいだ。

「いや、僕が言ってるんじゃないくて、商店街の若い連中が」

モツサンは、『まいったな』というように指先で坊主頭を搔いた。

「謝りたいんだよ、怒鳴っちゃったから、水掛けられて」

「あー、でも、わざとじゃないんでしょ」

「わざとならこつちも謝らないよ。こういうときどうする？ 相手、若い娘だし」

聞いてから少し悔いた。道端の地藏に歩けと言うようなものだ。

「花屋の子に花持つていっても何ですしねえ」

やっぱりだ。私は掌を団扇のように振って、出掛けていいよ、と合図をした。

「お店の床の間の花、枯れてますよ、十分。じゃあ、行ってきまーす」

バイクの音が妙にうるさい。そろそろ買い替えどきか、しかしいま店にはそんな余裕はない、近頃の若い者は蕎麦をくわなくなったなあ、と想いがあちこちに飛んだ。

さすがにゴローは店に置いて来た。この前の調子では、そう簡単に彼女を許しそうもないからだ。そうすることが私への忠誠心だとも言いたげな犬だ。ま、そこが可愛いといえは可愛いのだが。

プチフルーの店先に人影はなく、きつい花の香りだけが私を出迎えた。

「あの一、すみません。すみませーん」

花の値段というものがわからないので、私の手は、胸のポケットの財布を何度もさわり、その存在を確認している。ここらあたり、まるで子どもだ。

「あの一、床の間に飾る…」

「はい」と不意に背中の方から声がしたので、後の

言葉を飲み込んだ。

振り返ると、くだんの彼女がニコツと笑って立っている。

「あの、花をね」

「先日は失礼しました」

ベソをかいていた前回とは違い、声が明るく前に出ている。

「いやいや、私こそ怒鳴ったりして悪かった。で、君に謝りたいのと、ちょっと花を買いたいのと、それで」

この前は気にも留めなかったのだが髪の毛がショートだ。男の子のようにサツパリしている。ちよつとオデコで、眉のカーブは緩やか、しかも自然なまままだ、眉墨で書いたりはしていない。目鼻立ちを決してよいほうではないが、相手を崩したときのバランスが際立っている。スマイル美人とでもいうのだろうか。向かって左の口許に小さな笑窪ができる。それも加点材料だ。あらためて見ると確かに背も高い。私もかなり大きい方だが、目の高さが私とほと

んど同じなのだ。ただ股下の長さは呆れるほど違う。私のベルトの位置に彼女の股間がありそうな…少なくとも二十センチは差がある。

「あの、どんなお花を？」

彼女がちよつと焦れたように言った。

「店のね、この先の日本蕎麦屋なんだけど、知っているかな、床の間に飾る花を、と思つて」

「京壁ですか」と彼女は背中を見せて花の群れの中に入った。「…床の間の壁の種類なんですけど」

おお、若いのに分つているらしい。何だか嬉しくなった。

「そう、いちおう本格的な和風にしてあるので。違い棚もついている」

「何か違うんですかあ」

「あ。いや別に」と早すぎた採点を悔いた。

「これなんかどうでしょう？」

そう言つて彼女が持ってきた花は、金魚鉢の水草を空中におつ立てたような葉っぱに、ピンク色した小ぶりの花。私の感覚では床の間には合わない。

「なんという花？ それ」

知らない花はイヤだという精一杯の抵抗であつた。

「ボロニア。ピグミールランタンとも言います。案外日持ちがよくつて、一週間から十日はもちます。延命剤をうまくつかえばもつと」

「エンメイ剤って？」

「花の命はみんな大体短いですから、少し薬で延命を図ります」

「ああ、その延命」

花も人間並みに浅ましくなっている。そう思った。

「わたし思うんですけど、和風のお座敷だから日本古来の草花じゃなくちゃつて、頑固に考える必要ないです。どこにいつても春なら梅、柳、桜、秋ならススキ、桔梗、菊っていうんじやつまらないし。三原色が一気に使えちやう極楽鳥みたいなストレリチアもいいし、黄色ならミモザアカシアがつぶつぶしていて面白いし、提灯いっぱいって感じのオンシジ

ウムもいいし。形で人の目を引くなら狐の鬼火のイメージでグロリオサかな。生け花にタブーはないんです」

意外に饒舌な娘なのでびつくりしたが、それ以上に、花の名前を聞いていて頭が痛くなった。さらに、長くしゃべると客向けの言葉遣いが崩れてくるのが気になる。「必要ないです」とはなんだ。それはこつちが決めることだ。「つまらない」も同じだ。自分の価値観を押し付けているのに気がついていいのか、いないのか。『タブーがないのは、むしろ君の言葉遣いだろ？』と、いじめてやりたくなつた。

「どうします？」と、くだんの赤い、なんとかランタンという花を胸に抱きしめて彼女が私の顔をのぞきこんだ。

可愛さが突然に前面に出た。なぜだろう。モツサンの評価はブスだったはずだ。とっさに女体というものから離れて何年になるかを数えた。けつこう長い。女の性的な香り自体には美醜はないらしい。の

どが渴いてきた。

「いかな」

自戒するほどの妄想は抱いていないのだが、つい口をついて出た。

「はい？」と彼女が訝る。

「なに、西洋の花がだ。うちは日本蕎麦屋だぞ」

だからどうしたと、言われかねないのが気になった。

「じゃ、一つ聞きます」

「な、なに」

「床の間に蕎麦の花を活けないのはなぜです？」

私はうかつにも、方向を見失った。蕎麦屋に必要なのは蕎麦粉だけだ。花の段階で手折れば蕎麦の実は絶望になる。蕎麦にそんな仕打ちができるか。そう思った。が、言葉となって彼女の前に出てこない。

「パン屋さんだって小麦は店先の花瓶に活けないと思いません」

「だから、何！」

私はついに焦れた。ここらあたりが、五十九という年齢なのか、どうか。

「ナンセンスです、お客さんの決めつけ」

負けたと思ったのは、この後だ。

「いいも悪いも、合うも合わないも、床の間のお花を評価するのは、お店に来てお蕎麦を食べるお客さんです」

たしかに、自分の部屋の床の間ではなかった。見事に一本とられている。

「君が活けてくれるの？」

言い負けたショックで、非常識な質問が、さらりと出た。

「普通はしませんけど、この前お水掛けちゃいましたから、お詫びのしるしに活けてもいいです。でもお免状とか無いですよ」

「いいさ、蕎麦屋なんだから」

私の返しがよほど可笑しかったらしく、彼女は声も殺さずに笑い出した。

歯がきれいだ。私は肩をすくめながらも、そう思

った。

翌日、店のお膳を拭いていると、彼女がおっかなびつくりという感じで入ってきた。

「ああ、ほんとに来てくれたんだね、おはよう」

自分でもすつとんきような声だと思った。

「好き勝手に活けますけど、いいですか」

手にしている花束の嵩(かさ)は思いのほか少なかった。

座敷に座る作業を意識したのであるう、ゆつたり目のジーンズをはいている。何のためだろう、両脇に輪っかが付いていて、腰周りのその部分の形がミツキーマウスのように面白い。

「それっぽっちで平気」と笑いながら花束を指差すと、

「お座敷二十畳って言いましたよね、十分です」と返された。

もとより花の量に不満があつてのことではない。

会話を続けていないと何か息切れしそうで不安なの

だ。

そう言っておいて何だが、彼女が座敷に上がって来ると、とたんに言葉が途切れた。

店の床の間の花器は高価なものではない。たしか何年前か、女房が青空市か何かで買って来た、いわば出来損ないである。色も水色で、寂びも侘びもない。

彼女はしばらく小首をかしげていたが、キリンの首のように長い花を選び出し、長め・中くらい・短かめの三種類に切り分けた。茎か葉っぱが分らないものに赤い花がキラタンポのようにくつついていく。名前を聞こうと思つても彼女の雰囲気それを許さない。凜とした表情で花を挿す姿がまぶしかかった。

二三分だったかもしれない。しかし私にはその沈黙が五分にも十分にも感じられた。

「それは知ってる、ダリアだよ」

彼女が次に手にした赤い花を見て、私は我慢しきれずに言った。

「はい。客枝(きやくし)、中間枝として使います。

主枝(しゅし)にしたのはリアトリス、和名はキリンアザミだそうです」と、横顔を一瞬崩して彼女。

「なるほど、薊(あざみ)ね、うーん、そうか」

生け花の専門用語は分らないが、薊なら知っている。

次いで腕組みを試してみたが特に意味はない。若い女性と二人きりで座敷に居る。そのことに對する自分への照れ隠し、とでも言おうか。

活け終わると彼女は、向き直って威儀を正すと、

「未熟ですけど」と頭を下げた。

「あ、いやいや、こちらこそ勝手を言つて」

無礼だと怒り、きちんと對されるとドギマギす

る。我ながら自分自身が御しがたい。

「いまこのお店に一人なんですか」

「そう、一人」

モッサンはまだ来ていない。

「じゃあ、怖いですね」

しよつてるよ、と心の中で叫んだ。だれが襲つた

りするものか。

「夜なんか、よくあるじゃないですか、脑梗塞とか、心臓発作とか」

ああ、そつちのほうか、と早とちりを省みた。

「一応店を職人に譲つて隠居つてことも、考えてはいるんだけど」

うっかり口にしてしまつてから、それもいいな、と思つた。確かに一人暮らしは命のリスクを伴う。

それにしても若い者は、時として無邪気に残酷な指摘をするものだ。

「じゃ、これで…失礼します」

彼女は持つてきた紙で花や切り屑を丸め取ると、赤いズックを履いた。

「また、頼めるかな」

「はい、こんなのでよかつたら。お店のマスター通してもらえれば」

「ああ、それはもちろん」

「ちよつと心配だったけど、やってよかつた。嬉し
いです」

そう言う彼女の片頬に、笑窪がくつきりと出た。

「ああ、あの子はねえ、たしか中伊豆から来てるはずだよ、冷川峠越えて」

居酒屋で仲良し商店街の世話役をしているゴンが、生ビールの泡を手の甲で拭いながら言った。彼とは幼馴染だ。いたずら好きで中学時代、しょっちゅう担任の教師に頭を叩かれていたのでこの名がついた。

「苗字はオサダ、名前はたしかヒサエ……」

私が長い田んぼと漢字に変えると、覗き込んだゴンが首を振った。

「それ、尾っぽの尾に、定期券の定、定める。下は寿に恵む」

言いながら目がいやらしく細まっていく。

「な、なんだよー」と応えつつシツカリとメモする私。

「それはこっちのセリフさあ、まさか老いらくの恋、じゃないだろうな」

「六十までにまだ一年ある、老いらくはないだろう、老いらくは」

「あ、認めたな、恋のほう」

「おい、怒るぞ」

「だとするとだなあ……」

「違っつてば」

「その恋、強力なライバルがいるぞ、ゼン」

ゼンとは私の名前、上柳善衛から取っている。ヨシエが女のようなだというので、仲間内でこう呼ばれるようになった。

そんなことより聞き捨てならないセリフだった。

あの子に男がいるのか。

「いや、いまのところ男の片想い。伊刈病院の内科の泉っていう先生、歳は三十代前半だったかな？」

「何でお前が知ってる」

「お前も知ってるよ」

「え？」

「彼は蕎麦好きでさあ、いでゆ蕎麦の常連だって聞いたぞ」

「あー、あの、ヨレヨレの白衣着た、産毛っぽい無精髭の?」

「それそれ」と、ゴンは空のジョッキを挙げて、仲居さんにおかわりを頼んだ。

「ジョーダンじゃないよ、あんなのと! いくら医者でも」

「なに息巻いてるんだよ、変な奴だな。これで決まった、お前に恋心ありだ」

ゴンの言うとおり自分でも変だと思った。もしいたらの話だが、自分の娘ほどの歳格好だ。恋はない。ないと思う。しかし父親の心境というのなら否定できない。床の間に花を活けてもらったあの日から、胸の中に何か温かいものが育ち始めている。ただカレンダーをめくり、余生を縮めているだけの生活から脱出できそうな気がする。少なくともいまは、そういう自分を壊されたくない。それだけだ、とは思うのだが。

午後八時ごろ、久しぶりにモツサンの作ってくれ

たかけそばを食べた。味はよかったのだが、どんぶりに口を近づけるたびに湯気でむせて往生した。浅く軽い咳が連鎖して出てくる。ゴンと呑んだ晩から症状が悪化したのだ。

「ごめん。残すけど、まずいわけじゃないから」

しわがれた声でやっとそれだけを言うのと、客のいない座敷で横になった。モツサンに聞こえたかどうかは分らない。

横になればなつたで、咳が咳を呼ぶ。痰がつかえ息苦しくて涙が出てきた。

「親方、だから言ったじゃないですか」

異状に気付き厨から飛び出してきたモツサンは、ためらわずに受話器を取った。

「もしもし伊刈病院ですか、急患なんです。近くですから救急車呼ばないで車でいきますけど、急患扱いで診てください、待たせちゃイヤですよ、お願いします」

そうだ、待合室で息を引き取りたくはない。

病室で目が覚めたら朝だった。窓に射す日差し

加減で分る。ただし何日目の朝かは分らない。横になつたまま、あらためて室内を見回した。天井の白、壁の白、仕切りのカーテンの白、寝具の白、こゝろ白ばかりだと何やら気が滅入る。「もう外の世界には戻さない」そう言われているようで……。

「ゆうべはまいったよ」と隣のベッドで声があった。

「あ、よろしくお願ひします、上柳と言います私」

「あんたが来てガタガタしたと思つたら、その隣の奴の容態が悪化して集中治療室だかにお引越したろ、おちおち寝ていらねえの」

「すみませんでした」

「ま、退屈で死にそうだったから刺激にはなつたけどよ」

「ちよつといいですか」と質問に入つた。すぐ麻酔か何か打たれたのだろう、何も憶えていない。病名が推測できるデータが欲しかった。

「のどの痰を吸引してたぜ、ここでも。うっかりすると窒息死するからな。注射したかどうかは分らない。点滴はやつてたぜ、二回。注射と違つて準備で

分る」

人格はともかく隣にいたのだ。信憑性はある。

病院に担ぎ込まれてみると、自分や店の将来がにわかになつてくる。モツサンにのれんを継がすとして、店舗付き住宅そのものは貸すのか、渡すのか。買い取る金はないだろうから贈与になる。しかし譲渡したとたんにモツサンの態度が変わつて、追い出されやしないかなんて心配もある。いつそ養子にして嫁でもとらすか。たとえばブチフルーの寿恵とか。私は意外な方向に走り出した想いに、うっかり口許をほころばせた。

「ねー、何の病気だと疑つてるか、教えようか」

「え？」と私は、我に帰つて隣のベッドを見た。

「この病院の先生が、あんたのことを、だよ」

勢いよくカーテンを開けて顔を出し、三十代と思しき男がニヤニヤツと笑つた。

「そんなことが分るんですか」

「ああ、オレつて何回も入院しているベテラン患者だから」

「どうせ誤診でしょうからけっこうです」

まったく聞きたくないと言ったら嘘になるが、しよせんは素人だ。

「臆病者」と男が唾でも吐くようにして言った。変わった男だ。

病気をいいわけにする気はないが、いつあの世にいくか分らないと思つたとたん人並みの分別を失つて、寿恵の居るプチフルーに足繁く通つた。とは言つても、ゴロー抜きの一入での散歩を日に二回増やしただけなのだ。「おはよう」とか「このごろ犬連れたり連れてなかつたりですね」とか、毎回短く交わす役にも立たない会話が、楽しくてしかたがない。

その甲斐あつてか、立ち話しかしなかつた二人と一緒に喫茶店に入る日がやつてきた。寿恵が弁当を忘れ、昼飯を「軽くサンドイッチか何かで」とつぶやいたのを私がしっかりとキャッチ、思い切つて誘つてみたのだ。

長くは抜けられないということで、一番近い店にした。

「おじさん、言つては失礼かもしれないんですけど、具合悪そうですね、ずっとそう思つてました」席に着くなり寿恵が、一つ瞬きをしてから言つた。

やはりそうか、と少し気持ちが沈んだ。

「おじさんよりゼンさんと呼んでもらえる」

「ゼン、ですか…ゼンさん…」

「こどもの頃からのあだ名だね」

あだ名のいわれは言わないことにした。

「じゃ、わたしのことはヒサエと呼んでください

い」

ナンパした方とされた方が互いに名乗りあつているようで可笑しかった。

寿恵はウェイターを呼んでミックスサンドとココアを頼んだ。

「お客さんは？ コーヒー…」と青年が覗き込んだ。

「うらやましいだろ」と私は、その彼の好奇の目に応えた。

「はい、交替したいくらい」

「わたしはゼンさんがいいな、あなたより」

「うれしいねー」と本気で喜ぶ私。

「近くにおいてほしいのは、そばや、さんですか、やつぱり」

即席にしては上手い落ちだとは思ったが褒めなかった。

寿恵は意味がわからなかったのか、きよとんとしている。

ウェイターが大袈裟にうなだれて引き下がっていた。彼にしてみれば懸命に接遇したつもりなのだろう。

「それよりゼンさんがお店に来るようになってから、どんどんお客さんが増えているの。ね、どうして? もしかしたら陰で宣伝してくれてるとか」

たぶん噂になっっているからだ、と思った。『どんな子だ』と寿恵を見にくるのだ。まさか『あんたを

見に来た』とは言えない。それでとりあえず花を買う。陰に噂好きのゴンの「暗躍」が見え隠れする。

「何もしてないよ。たぶん看板娘がいるからだろう」

意味としては大差がない。そのとおりだと思う。

「まさかね」

寿恵が、それでも嬉しそうに笑った。

目の前で泉医師がもりそばを食べている。大切なお客様だからそれはいいのだが、どう考えても今日の来店目的は蕎麦ではない。いつもと食べ方が違うのだ。ズルズルツといかないで、しきりに噛んでいく。

「微熱は続いていませんか? ご主人。なんとなく体がだるい、とか、このごろ妙に痩せてきたとか」

それ来た。思ったより仕事人間らしい。昼飯の時間を使って問診を始めている。

実はあの日担ぎ込まれた病院から逃げてきた。目覚めた日の午前中だ。こういう病気を探すことだけを楽しんでいる医者はず手だ。うっかりすると病名まで押し付けてくる。万一誤診で伝染病だなどと言われたひには、ご近所に迷惑をかけ、常連客に心配をかけ、店は事実上閉鎖に追い込まれ、つまるところ、個人としても商売屋としても破滅してしまふ。死んだ女房と二人で、辛酸をなめてここまでにした蕎麦屋なのだ。「ハイ、検査しましょうね」といった調子で軽々しく言ってもらいたくはない。

「ほかの病気ってこともあるでしょうが！」と、その想いが言葉をきつくした。

誰だって胸の病だとは思いたくはない。

しかし泉医師はピクリともしない。根が鈍感なのかもしれない。

「ツベルクローゼ以外の、風邪症候群とか、気管支炎の類とか？ うーん、そうかもしれないけど…」

ほら見ろ、と私は胸を張った。

「でも検査をすれば、かもとか、だとしたらとか、曖昧なのが消えますよね」

「曖昧さに人生を託してるのが一般人さね。世間はね先生、学校じゃないの、大学じゃないの。オネガイしますよ」

泉医師が私の論に反駁しようとして、口を開けたそのときだった。ガラツと入口が開いて「こんにちはー」と寿恵が入ってきた。

泉医師は急に下を向き、あわてて蕎麦をつかもうとする。勢い余って割り箸が一本折れ曲がったのを、しっかりと見た。

「あら先生…」

「そう、この人は名医だから、蕎麦を食べながらでも診察できるんだ」

「それは嘘だ、嘘ですよ」とまるで中学生のようにまともに否定する彼。

「いいからいいから」と私は、人差し指を立てて唇に当てた。

「なあーんか変。でも安心した。顔色良くなっ

るもの」

「そ、そう?」

「うん、目のまわりにクマないし、声だつてしわがれてないし」

頑張らなくて、という気持ちちが身体を治しにかかったのだ。この先生の処置がよかつたわけではない。そう思った。

「先生、花の注文は? どうせ帰りに寄るところだつたんでしょ」

半分ぐらい皮肉で言つた。私は正直なところ、自分がここまで意地悪な人間だとは思わなかつた。これも体調のせいだ。それとも歳のせいだ。

「あ、どうぞー」

彼女の笑顔がひとときわ輝いて見える。

「きょうはありません。すみません」

声が消え入りそうだ。これはたしかに惚れていてる。しかし見たところ脈はない。絶対モツサンにも立候補させようと、心に決めた。

「じつはゼンさん、きょうは教えてほしいことがあ

つて」

「ほー、この蕎麦屋のオヤジにかい?」

「漢字なの。ゼンさんてさあー、小説書いてる人なんだすつて?」

横で泉医師がびっくりしているのが分つた。しかし誰がそんなことを彼女に喋つたのか。

『もしかしたら、ゴン?』

いやな予感がした。

「商店街の世話役の人から聞いたの」

やつぱりだ。あることないこと喋つていなければいいが。

「で? どんな字」

ここは先を急がせた方がいい。

「女へんに、砂漠の漠のさんずいをとつたやつを付けるんですけど」

あの喫茶店はよかつた。寿恵との距離が一気に縮まつている。彼女の言葉遣いと声質で分るのだ。

「先生?」と振ると、イヤイヤと首を振つた。

こういういやらしいやり方は、本来好きではない

のだが、モツサンのためにも、相対的にライバルの評価を落としておく必要がある。

「それはねえ寿恵さん、ボと読みます、はい」

自然に背骨がまっすぐになった。いや、実は、胸を張った。

「ボ？ それだけ」

「そう。字の意味は醜い女。今様にいえばブス…」
と言つてしまつてから臍を噛んだ。『しまった、ゴンのやつ、毘を掛けたな』と思つたのである。商店街で彼女は、ブスちゃんを通つていらしいのだ。

「やだー、ずっと冷川御前のこと、女の理想だと思つてきたのに。父さんたらひどい、この字、聞かずに絶世の美人のことだなんてウソ教えて」

なんだ仕掛けはゴンではなく父親かと、また自分の早合点を恥じた。

「ぼくがこのお店を、一人でですかあ、無理ですよ、そんな」

モツサンが怒つたような口調で言った。

私にも多少の不安はある。だが、三日三晩考えたのだ。モツサンに店を譲つてからなら、泉医師がいうところの「ツベルクローゼ」と診断されても、暖簾のキズは浅い。店を出て他所に家を借りたあとならなおさらいい。それに、泉医師の杞憂かもしれないのだ。そうなら確かに、多少店への未練は復活する。しかし、こういうことは、何かないとふんぎれないものだ。空の上の女房が「きっかけ」をくれたのが俄かの入院、そうなのかもしれないと本気で思つた。

「だれか、女の子でも助手にやつてさ」

その女の子は寿恵と、私の中では決まつている。

「そーい問題じゃなくて」

こつちも、知つていて提案している。時期尚早というか、モツサンにしてみれば、いい迷惑なのに違いない。これで、結婚を前提とした彼女でもいいれば、それなりの欲も出て、一国一城の主は魅力なのだろうが。

「ま、とにかく考えておいてくれや」と、寄り相撲

は「ここまでにした。」

「このごろ仏壇磨いてます?」

モツサンが唐突に言った。この子はときどき意表を突いてくる。

「ん、いや、たしかに……ここ一月ほどはご無沙汰だが」

「おかみさんにちゃんと聞いてからにしてくださいよ、僕が叱られちゃいますから。死んだ人に叱られるってことは、要するに僕の目の前に出てくるってことですから、ね」

理屈だ。たしかに怖がるう。

「会ってもいいけどなあ」

「僕のいないところで呼んでください!」

「じゃあ、モツサン。うちのやつがいいって言ったらオーケーってことだな」

「言ったらって、本気ですか」とモツサンは、これ以上はないという大ききで目を剥いた。

とりあえず、気持ち伝えることが目的だった。

口外することで自分自身の意思が明確になる。そう

思ったのだ。

そんなことがあつて何回目かの土曜日、私は寿恵の半日勤務が終わるのを待って、彼女の車で修善寺までドライブをすることになった。

もちろん約束をとりつけての、言ってみればデートである。

車はサイコロ型の小型車で、外観からは想像できないほど車内が広く、昨今人気の車種なのだろうか。色は赤、加えて隣には若い女の子、とくれば、いささか派手すぎて妙にお尻も気持ちも落ち着かない。商店街の知り合いに見られはしないかと、冷川峠の登り口に着くまではうつぶき加減で通した。

そんな私には頓着せず、彼女は活発にしゃべり続ける。

「わたし実はこの峠道苦手なんです。勾配がきついでしょ、カーブが多いでしょ、それに狭いでしょ、道幅が。車二台がすれ違えない所が何箇所もあるんですよ。それと制限時速だっただいたい三十キ

口、自転車じゃない、車だつてーの。そこをバスが通るんですよ、考えられます？日に六往復ぐらいいな、もつとかな、しかもわたしの出勤と帰宅の時間にピッタリ合わせてなの」

助手席に坐つてみて気づいたのだが、彼女、たしかに運転はうまくない。この技量では、むしろ対向車の方が怖いだろう。ま、口が裂けても言えないけれど。

「いまは秋口だからいいんですけど、冬は雪が降つたり路面が凍つたりで、けつこう始末悪いんですよ、わたしチェーン巻くのダメだし」

これほど通勤路をけなす人も珍しいが、つまるところ全て、彼女の未熟な運転技術に起因すると言つていい。

私も地元の人間だから、冷川峠は当然ながら初めてではない。しかしこうして女性の運転に身をまかせ、フロントガラスに映る木々の影の変化や、時折キラツと輝く日差しを見ていると、店とアスファルトとアーケードの中で、ちつぽけな自己と対話して

いるだけの日々が寒々しいものに思えてくる。かすかに鼻腔を刺激し続けている若い女性の香りがまたいい。外の風など入れてたまるか、ときえ思う。

「あ、あのだいたい色のお花。ゼンさん、なんているの？」

「花屋が聞いてどうするのー」と目の前を通り過ぎていく、ノーゼンカズラを見る。道が急カーブで、花のある「絵」が少しの間、真正面にきたのだ。

「知らないなあ、ボクも寿恵と大差ないから」

「ふーん、優しいんだ、ゼンさんて」

人の心は読めるらしい。私が知らない振りをしたことを瞬時にとらえている。

「そういうえばゼンさんて野草の方が好きなんですかね」

嬉しさのあまり、心が久しぶりに詩的になつてきたので、少しだけ気取つてみることにした。

「野の花つてエライんだ。見てもらおう、見せびらかそうなんて、たぶん思っていない。生まれた場所で、育つたところで、ただ黙って無心に咲いてい

る。人間、これがなかなかできないんだなあ」

「わたし、家を出るって言われてます、家族に」

「えっ？」

この子も突然飛躍する。もしかしたら相当頭がいいのかもしれない。

「兄が結婚するんです。長男。そうすると農家だから当然跡を取って両親をみて、そうなるわたしは邪魔な小姑」

「古いなあ、一昔前のシナリオだ」と思わず私は笑った。

「テレビドラマじゃありません」

彼女はあくまでも深刻な横顔を見せている。

「でも普通、若い娘は居るといっても都会に出て行くよなあ」

「もう若くないってことですか、わたしが」

だから家を出ろよ、と言いたかったのだが、取りよによっては確かにそうなる。

「この前話に出た冷川御前のころは、娘といえれば十二ぐらいから十九ぐらいまでだったから、その意味

では若い娘じゃないな」

「ひどい。ふつうフオローしません？ こういうとき。さつき優しいって言ったの取り消そうかな。じやあ何ていうの？ 二十三歳ぐらいだと」

可哀相だが言うしかない。早く結婚しなくては、と思わせるためにも。

「二十歳以上なんだから年増(としま)」

「うっそーっ」

「婆初(はははじ)めとも言うな」

急ブレーキがかけられ、車がというより私たち二人が、前にのめるようにして停まった。

「ババアって、まだ二十三よ」

「だからさ、今から三百年以上も前の話だって」

この釈明の効果は、車が走り出したのですぐ確認できた。

「じゃ冷川御前は見初められたくらいだから、そのときはピチピチのギャル」

誰しもがそう思いたいだろうな。

「それがね、文献から推定するに二十七、八のと

き」

「じゃわたし、じゆうぶんオーケーじゃない」

「そう、自信もつていい。それに冷川御前、つまり年増のお光さんは、美貌や色気ではなくて、心意気や豪胆さで見初められたんだ。それから、持ち前の度量と英知で使用人の尊敬も勝ち取った。すごいことなんだ、当時名家だった藤堂家第二代高次の側室の身から、正室にまで登りつめたんだから。もちろん世継ぎも産んだ」

そのお光さんの生まれた所が、これから向かう中伊豆町冷川だ。

「もしかして励ましています？ わたしのこと」

何という自己認識の鋭さだろう。「美貌や色気ではなく」というところだけを取り出して、これほどいい話を「なぐさめ」と受け取るとは。私は言つてやりたい、目の前にある自分を写す鏡をどかさなければ一步も前に進めない、とね。

峠の頂を少し越えた所にバスの停留所がある。四角い車はそこで停まった。

どうしたことだろう。寿恵はフツと寂しそうな表情をみせた。タイムिंग的にはここでキスだ。もちろん若い恋人同士なら、の話だが。

「わたし、こんなに苦手な冷川峠を毎日往復する。それだけのために、あの花屋さんに就職したんです」

それは「話」ではなく、「告白」に近い雰囲気だった。

その、彼女の話をかいつまむと、次のようになる。

去年の二月、伊東に買物に行こうとして峠越えを始めたころからみぞれになり、頂上近くで雪が激しくなった。ちょうどバス停の辺りで進退がきわまつたわけだ。午後二時半頃だったという。登ることもユーターンすることもできない。チェーンは自分で装着できないのはじめから積んでいない。雪雲は厚さを増し冷川峠を夕暮れ時のように暗くしていく。心細さに涙ぐむ彼女。ケータイで助けを求めようとしても父母は留守、東京へ出かけていった兄に

は何とか繋がったものの、電波状況が悪く、ほとんど何も伝わらなかった。そこへ通りかかった一台の車。降りてきた青年は、なんと自分の車に着けていたチェーンを外し、さらに、ただ手渡して去るのではなく装着までしてくれた。「ボクの車のタイヤ、これくらい雪道なら負けないから」と言つて。彼女は文字通り挿んだ。ただ、何度聞いても、連絡先や名前を言わなかったという。

たしかに今どき、すがすがしい話ではある。

「こうして朝に夕に通つていればもしかしてあの人に会えるかも、か・・・」

「バカみたいだけど、そう」

私は大きく息を吐いた。モツサンの顔が浮かんだ。勝ち目はほとんどない。逢えない分、想いが叶わない分、相手の男はシツカリと美化されている。

「それで、出て行けとか職住接近で伊東に住めとか迫られると困るわけだ」

寿恵はコクリとうなずいた。

私はその横顔をきれいだと思った。女の美しさは

目鼻と口の位置関係だけできまるものではないらしい。

「ここからの下り、運転しようか」

そうしてやるべきだと、何となく思った。

「バカにしないでくださいね、たとえバカでも、わたしのこと」

「大丈夫。ボクも昔からそういう意味ではバカだから」

そう言いながらうっかり目頭が熱くなった。

海抜三百六十メートルといわれる峠から、冷川の支流にあたる京入道川に沿うようにして山腹を下る。右に左にハンドルをきりながら、慣れない真四角な車を懸命に操っていると、自然に寡黙になつた。親子ほどに年齢が違う二人が互いに交わすもの、それが言葉から心が変わつたということだろうか。

そのまま峠を下り、彼女の自宅のある八幡はつまを行き過ぎて修善寺駅まで走る。そこから私は親戚を訪ねて三島に向かい、彼女は八幡に引き返す。

そもそもが、店で冷川御前の話題が出たところで思いついたプランだが、三島行き自体の動機は浮ついたものではなく、モツサンを私の養子にするための根回しが目的だった。養子にした後が嫁取りで、その嫁さん候補が寿恵というつながりになる。いつ本当に病気で倒れるか分らない。今回の入院騒ぎは私を変えた。何か残さなくては。いま何かしなくては。そういう想いとらわれている。

左カーブを切るついでに彼女を見る。小さな寝息を立てて、子どものような顔をして眠っていた。

『それにしてもでかい女だ』

私は、助手席が狭く見えるその体躯に、思わずクスツと笑った。

峠道が終わる。狭い田んぼの緑色が、風にさわさわと揺れていた。

二人して冷川峠を越えてからというもの、寿恵と私の親密度はグンと増した。そうは言っても何があるのではない、ま、擬似親子としてのそれなのだが。

ところが好事魔多しというところか、モツサンにカノジョができた。いや、前からいたのに私が知らなかっただけなのだ。相手は二十七歳、近く結婚して同じ町内にアパートを借りるという。三島の親戚の反対は予想以上に強硬で、養子にするプランはすでに頓挫していた。モツサンの告白はそれを確定的にしただけである。なぜここに来て急に結婚なのか。聞けば、蕎麦屋がモツサンに嫁を取らせて後継者にするらしいという噂が広がり、恋人が繰り上げ結婚を迫ったのだとか。だとすれば、噂の中の「嫁」というのが誰なのか気がなってくる。まさか具体的に寿恵の名が挙がっているとは思われないが、心配にならざるをえない。なぜなら噂の出所が自分自身かもしれないからだ。少なくとも幼馴染のゴンにはほめかしたような気がする。

そんなこんなでゴタツイタ日の夕方、泉医師が店に来た。

式場確保のためということで、モツサンは二、三日連休になっている。仕方がないので私が久しぶり

に厨に入った。もし蕎麦のコシが甘いとしたら、それは落胆のあまりというものだ。腕が原因ではない。

「ビール、ご一緒にいかがですか」と、天蕎麦セツトを出したところで勧められた。

「え」と、初めてのことなので少々驚いたが、売上げアップに励まないという手はないので、「じゃあ、遠慮なく」と大瓶を二本、テーブルの上に置いた。

「ご主人、気がついていらしたんでしょ？」

医者も病院も自分で選ぶ。退院して何日も経つのにしつこいことだと、やや呆れた。

「まだお疑いですか？ テーバー。思い過ごしですよ、先生の」

「いえ、ボクが花屋の子に恋をしてるってこと」

あからさまな告白に驚き、コップにビールを注ぎすぎた。

泉医師は、コップの外周りをゆっくりと落ちていく泡を、拭いもせずに見つめている。

「彼女に何度も言おうとしたんですが」

「好きとか、愛してるとか、ですか」

「ええ、でも彼女は別の男性しか見ていないんです、それが分るので」

私は手酌したビールを口に運ぶと、一気に飲み干した。

「で、その別の男性って、誰・・・」

「あなたです、五十九歳の上柳さん」

「ははっ」と区切って、後は「ははは・・・」と笑い飛ばした。わざわざ「五十九歳の」は良かった。

何を非難されているのが明確でいい。

「彼女、ファザコンなのかもしれませんが、いずれにしろ一時の気の迷いです。お願いです、交際をやめていただけませんか」

「この歳で、先生のライバルってのは嬉しいですけどね、まったく、全然の、的外れ」と、交通整理よろしく、笑いながら大きく手を振った。

温和な泉医師が唇を噛んで何かに耐えている。きつと小馬鹿にされたと勘違いしているのだ。

「寿恵が恋しているのは違いますが、『冷川峠』なんです」

本人の了解はとつていないが、ここは言うしかないと思ひ、彼女から聞いた話を、ほとんどそのままの形で伝えた。

「ご主人にそんなことまで話しているんですか、彼女」

じつと聞き入っていた泉医師が投げつけてきた。

『あ、そうきたか』と私は一瞬目をつぶった。恋の病に薬はないとは至言だ。

「ちなみに先生は花屋の店先でどんな話を…」

一応興味がある、と言つたら失礼か。

「用事が花なので、患者さんの入退院とか、病状とかいろいろ」

案の定だ。それで恋が芽生えるくらいなら、恋愛小説は要らない。

「たまには間違つたふりしてお尻をさわるとか、そういうことは」

「そんなことしてらんですか、彼女に」

「と、ととと、してませんよー、参つたな。たとえば！ です」

名譽も社会的地位もある人が、目の前で肩を落としているのを見ると、可哀相にはなる。『ただ医者だろ』とも思う。

「医学部じゃ教えないのかなあ、女体の構造とか」と、つい口に出た。

「え？」

小声でよかつたと、胸をなでおろしたが、それにしては、笑い事ではない。誤解が誤解を呼び、收拾がつかなくなる恐れは多分にある。第一最も傷つくのは彼女だ。

「わかりました」

「ありがとうございます、気の迷いなんです彼女も」

「まだ何も言つてませんよ。しかし確かに、このままじゃあ、三人が三人とも身体に悪い。蕎麦屋は威勢とおせっかいが売り物。ちよつとひねてますけど、キューピッド役、引き受けましょう」

半分ぐらいはヤケだった。そうと決まれば、ビール之二、三本は追加してもらわなければ間尺にあわない。

「それでいいですよね、先生」

「はい」と泉医師が頭を下げた。

裏でゴローが「ワン」と一つ吠えた。きつと「お人好し」と言ったのだ。

一説によれば後の冷川御前お光は、洗濯をしていた川でのこと、退屈しのぎで自分に悪戯をしようとした武士に抗議で水をぶっつけた。これがきつかけで運が開けるのだが、寿恵はどうか。ブスちゃんで大女なのは一緒だ。水を掛けられた私は、彼女を藤堂家のような名家に入れてやる義務がありそうだ。私のいやらしい一面を活かして、泉家の調査を試みることはできた。わが「娘」の婿の家なのだから当然と言えば当然だ。しかし思い直している。調べた結果が案外貧しかったというならいいが、家柄や門地を重んじるとてもない名家だとしたら。寿恵

は、お光のようにその強靱さと才覚でのし上がっていきけるだろうか。答えはノーだ。いま追っている恋の夢一つとっても幼すぎる。調べようが調べまいが、既にある客観的な事実は変わらないが、私は、あえて二人だけを見つめて、その恋の行方を確かめようと思つた。

噂が錯綜している。さすがに彼女と喫茶店に入るのははばかられたので、いっそのことと、自分の店に呼んだ。もちろん表向きは床の間の活け花である。泉医師には少し時間を遅らせて昼食をとりに来るよう連絡をとつた。

私は、真摯に泉医師の気持ちを寿恵に伝えた。ためらわず、もってまわらず、真つ直ぐに、それしかないと思つたのだ。

「わたし、先生の気持ち、知つてました」

さもありません。けつして鈍感な子ではない。むしろ繊細な子なのだ。

「これでも女だから」

「で？ 気持ちちは動いたの、知つて」

寿恵は左右に首を振った。

「やだとか、嫌いとかじゃないの。今でも夢に見るの、冷川峠の人。あの人じゃなきゃだめなの。ううん、会えたって、相手の気持ちだつてあるんだから、恋が叶うとは思わないけど。わたし顔わるいし、大女だし、大学出てないし、貯金ないし、実家にだつて追われてるし、もう二十三だし…」

彼がもう結婚しているかもしれないし。偶然峠で出会えたとき、助手席にきれいな恋人を乗せているかもしれないし、と心の中で私がさらに付け加えた。

私は彼女の心の奥深くに潜む得体の知れない化物を見たような気がした。それらを全て覆い隠し、表向き彼女を快活に見せている一枚の幕。それが『冷川峠』なのだ。

彼女は冷川峠の人に会いたかつたのではない。現実に出会ってしまったことを恐れていたのだ。万一出会えた後の、目標を失った自分がみじめすぎるからだ。

「寿恵」と、私ははじめて本人に向かって呼び捨てをした。

「ごめん、君の父親みたいな気持ちで言いたいから」

彼女は小さく「ありがとう」と礼を言った。

「寿恵はさ、その人と出会いたくて毎日峠を越えているんだつたよね」

「そう」

「その寿恵と同じことをしている男性がいるんだ」

と私は、寿恵の心にアプローチするルートを『冷川峠』に求めた。

「その男性にとつての冷川峠は、プチフルー、花屋だ」

「だつて泉先生、わたしとは会つてるし、お話もしてる」

「いや、泉先生が会いたいのは寿恵の心なんだ。

冷川峠の青年にまったく会えない寿恵よりも、恋しい人が現実にも目の前にいて、話もしているのに、その人の心と出会えない先生の方が何倍も切ないと思

う。それでもずっと、見守っている。そう、寿恵のことを。なあ、胸に手を当ててじっくり考えてみて、どっちが寿恵を幸せにできる男性か」

「じゃ、教えて。わたしがえらい先生のお嫁さんになつて何ができるか、教えて」

「甘ったれるな、バカ」

後先を考えずに怒鳴った。父親だったら、きつと同じ気持ちだと思ふ。

「ごめん」

すぐ言い過ぎたと謝るところに「他人」が出る。

「それは自分で一所懸命考えなきゃ。それが相手の愛情に応える、唯一で、最良のものだと思うんだ」

寿恵が潤んだ瞳を閉じると、光るものが一滴、ゆつくりと落ちた。

「忘れられるかなあ……」

「ああ、現実の恋の中に入っていけば、きつとね。

第一……」

寿恵が「うん？」というように顔を上げた。

「寿恵が冷川峠で助けてもらったその時刻からする

と、青年は通勤で峠を行き来している人じゃないかも。たぶん旅行者だ。そうだとすると、寿恵の通勤時に彼に出会う確率なんて、ほとんどゼロだよ。そうだ、ナンバープレートは見たの、そのとき」

「ううん、そんな余裕なかった」

「もうやめな、ほんとのお婆さんになるまで待ち続ける気なら別だけど」

また、うつむいた彼女。

「彼の存在は、いままで充分、寿恵の心を豊かにしてくれたし保護もしてくれたよ。な、勇気を出して、新しい恋に挑戦してみようよ」

「ありがとうございます」と入口で声が出た。

見ると、泉医師が頭を深々と下げている。いつから来ていたのだろう。

「ボクが来てもらったんだ」と寿恵の反応をうかがった。

「先生、いいんですか？ こんな時間に、患者さん放つて」

涙でくしゃくしゃにした顔で、笑顔を急造する彼

女。

泉医師が、ガチガチに硬くなつて玩具のロボットのように寄つてくる。

「寿恵さん、あなたの心の中にいる青年は、雪の日から一度だけあなたを救いました。でもボクは、これから一生の間あなたを助けて、十回でも二十回でも何十回でも、あなたを救っていきます。その覚悟です。ずっと好きでした。結婚、してください。お願いします」

『言うじゃないか、なかなか』と私は顎をなでながら、二人を交互に見た。

嘯み付きそうな顔で固まっている彼。その彼を見つめながら、無言でボロボロ涙を流している彼女。

ここはゴローの出番だと、私は膝をうった。

「あ、忘れてた。寿恵さんも先生もごゆっくり。ゴローの散歩の時間なんだ、大変大変」

サンダルを引つ掛けて裏庭に向かう私は、すでに成功を確信していた。

多忙な一と月だった。

まずモツサンとその彼女を口説いて、店ごと貸すから住んでくれと頼み、了解を得た。家賃としては何も取らず、売り上げの一定割合をもらうことにした。むろんその上限も決めた。店が流行らなかつた場合でも、これなら若い二人の生活を圧迫しないで済むからだ。私とゴローは、ボロだが少しは庭の付いている平屋を借りて引越すことに。結局、私の『愛情の出口』は、寿恵ではなく、犬のゴローに落ち着いた。それが分つてかどうか、ゴローが以前にも増して私に甘える。これではまるでご隠居さん状態だ。今となつては、泉医師に、私が寿恵の彼氏と疑われた日が懐かしい。

そうそう、寿恵に偉そうなことを言った手前、病院の検査を避けて通つた自分が恥ずかしく、意を決して泉医師のもとを訪ねたことも告白しておこう。結果はシロ、風邪をこじらせたのだろうというのが寿恵のフィアンセの所見だ。むろん信じる。彼が助教授だからではない。そう、可愛い我が「娘」寿恵

の夫になる男だからだ。それにしても、彼女を人手に渡すのはちよつと口惜しい。しかしこれも、世間の父親と同じと言えは同じで、異常らしい異常ではないと思う。

「どれ、モツサンの彼女でもかまいにいかうか、とりあえず、寿恵のいる花屋の店先経由で。」

(完)